

シベリウス

篠崎靖男

ROAD TO THE DEEP NORTH



©Benjamin Ealovega

しがぎん経済文化センター31年目の新たな第一歩となる
「篠崎靖男プロデュース・オーケストラ・シリーズ」第5弾が決定!!
2015年に生誕150年を迎えるシベリウスの傑作“交響曲第2番”と、
世界的ピアニスト中村紘子をサポートに迎えてグリーグのピアノ協奏曲をお届けする。
2015年4月、北欧クラシックの魅力をたっぷりと堪能してほしい。

生誕150年シベリウスと
指揮者・篠崎靖男の
フカ〜い関係!!

2015年、北欧フィンランドを代表する作曲家ジャン・シベリウス(1865~1957)が生誕150年のアニバーサリー・イヤーを迎える。母国の首都ヘルシンキをはじめ、世界各地でさまざまな記念イベントが予定されている。

シベリウスがフィンランドの国民に愛されている理由のひとつに、代表曲である交響詩「フィンランディア」の存在が大きい。作曲されたのは1899年。当時、フィンランドは帝政ロシアの圧政下で庶民は苦しみ、独立運動の機運が高まっていた。そんな時に登場したのがこの「フィンランディア」である。フィンランドへの愛国心を目覚めさせる力を秘めた音楽に、帝政ロシア政府は危機感を覚え、演奏禁止処分にしたほどであった。「彼がフィンランディアを作曲しなければ、今日のフィンランドはなかった」といわしめるほど、シベリウスはフィンランドの国民にとって重要な人物なのである。

指揮者・篠崎靖男にとってもシベリウス、フィンランドとの縁は深い。2000年、フィンランドのヘルシンキで開催された第2回シベリウス国際指揮者コンクールで篠崎は第2位に入賞、ファイナルで演奏したのが交響曲第2番であった。この模

様はテレビ中継され、共演したヘルシンキフィルからも絶大な支持を受けたという。その後、ヘルシンキフィルの定期演奏会に毎年迎えられ、フィンランド放送交響楽団、タンペレ・フィルハーモニー、トゥルク・フィルハーモニーなどのオーケストラとも共演。2007年からはキュミ・シンフォニーエッタの首席指揮者・芸術監督を務めている。彼の地で認められた交響曲第2番は、篠崎にとっても思い出の深い曲なのである。

交響曲第2番とは? イタリア滞在で誕生した 北欧の傑作シンフォニー

シベリウスの交響曲第2番は、シベ2の略称で親しまれているほど、彼の交響曲の中で最も有名な作品のひとつ。今でも世界中のオーケストラで演奏され、観客を熱狂させている。

この第2番は北欧の自然を思わせるような民謡風の親しみやすさと雄大なリズムが織りなす壮大なスケール感から、クラシックをあまり聴いたことのない人やこの曲を初めて聴く人にも親しみやすく聴きやすい作品だ。

この曲は友人のアクセル・カルペラン男爵に献呈されている。彼はシベリウスの最大のパトロンであり、シベリウスにイタリア旅行を勧めたことがきっかけで、この第2番が生まれたといわれている。

る。厳寒のフィンランドで生まれ育ったシベリウスにとって、滞在したイタリアのラパッコという町はとても温暖で、魔法がかかった国のように感じられた。ここで豊かな楽想が練られ、フィンランド帰国後に交響曲が完成した。

イタリアで出会ったさまざまな伝説、宗教、芸術作品からインスピレーションを受け、とりわけ第2楽章はドン・ジョヴァンニ(ドン・ファン)の伝説から着想を得たといわれている。それまでの内省的な表現から解き放たれ、洗練された印象はあるが、第3楽章から第4楽章に連なるクライマックスの力強いオーケストレーションは、美しくも厳しい北欧の自然と雄大な大地を想起させる。

シベリウスは生涯で7つの交響曲(クレルヴォ交響曲を除く)を作曲しているが、20世紀初頭に誕生したこの傑作シンフォニーは、篠崎のタクトに導かれ、シベリウスを詳しく知らないクラシック・ファンにも大きな驚きと感動を与えてくれるに違いない。



©s.yamamoto 日本センチュリー交響楽団

シベリウス・ア・ラ・カルト 名曲まるかじり!

北欧の自然を感じる 叙情あふれるピアノ曲

シベリウスのピアノ曲は一般的になじみが薄いですが、北欧の自然の美しさを凝縮した叙情あふれる小品が多い。シベリウスといえばフィンランド在住の舘野泉(日本シベリウス協会前会長)の演奏が印象的だ。病気の後遺症で右手が不自由になり“左手のピアニスト”として再起したことで近年脚光を浴びたが、1994年にシベリウスが後半生を送ったアイノラ山荘で、彼が愛用したスタインウェイで録音したことは世界初となり、大きな話題となった。北欧を愛し、シベリウスを知り尽くしたその素晴らしい調べにひたってみよう。

代表曲のひとつとなった 生涯唯一のコンチェルト

篠崎靖男プロデュース・オーケストラ・シリーズvol.1(2011年)でも採り上げたヴァイオリン協奏曲二短調は、シベリウスの唯一のコンチェルトである。若い頃はヴァイオリニストを志望し、ウィーンフィルのオーディションも受けたこともあったが、その夢をあきらめて作曲家の道を選んだという。1903年に完成したこの協奏曲の初演の評価はあまり芳しくなかったため、その後大幅に改訂を加え、より交響的な楽曲になったという。現在では交響曲第2番やフィンランディアと並ぶ、シベリウスの代表曲のひとつである。

歌曲、合唱曲もいっぱい 声楽はバイリンガル!

交響曲の作曲家というイメージが強いシベリウスだが、その生涯の中で200曲近い声楽曲を残している。歴史的な言語事情を反映し、歌曲はスウェーデン語、合唱曲はフィンランド語とバイリンガル。歌曲にはフィンランドの詩人のスウェーデン語の詩を用いている作品が多い。また交響詩「フィンランディア」は後に歌詞がつけられ、シベリウス本人の手で合唱用に編曲されている。フィンランド出身の映画監督レニー・ハーリンが手掛けた『ダイ・ハード2』(1990年)のエンディングにも使われていて印象的だった。



今

年でデビュー55周年を迎えたピアニスト・中村絃子が、

篠崎靖男が指揮する日本センチュリー交響楽団と共演する。演奏するのは北欧ノルウェーの作曲家エドヴァルド・グリーグ（1843～1907）のピアノ協奏曲だ。若き日のグリーグが作曲した唯一の協奏曲であり、彼の名を高めた出世作でもある。ポーランドのピアニスト、アルトゥール・ルービンシュタインの自伝には、ある会食の席でラフマニノフが「ピアノ協奏曲ではグリーグのものが最高だ」と言ったとも記されている。

当時、ヨーロッパ諸国ではそれぞれの国の民族的要素を題材にした新しい音楽が生まれていた。それらの作曲家は「国民楽派」と呼ばれている。ノルウェーの民族音楽から着想を得て多くの作品を生み出したグリーグもそのひとり。第1楽章の冒頭はしばしばBGMなどにも使われるほど有名な曲だが、このピアノのフレーズはノルウェーでよく見られるフィヨルド（断崖絶壁の入り江）に注ぐ滝の流れを表現しているとか。また、この楽譜を当時高名なピアニストであった

グリーグを代表する唯一の協奏曲 その魅力を彩るエピソードの数々

リストに見せたところ、初見で弾きながら第3楽章のある部分を指して「これぞ北欧だ！」と快哉を叫び、グリーグの才能を称賛したという。

グリーグのピアノ協奏曲を他のどの作品よりも多く演奏したといわれているのが、オーストラリア出身のピアニストで作曲家でもあるパーシー・グレインジャー（1882～1961）だ。民族音楽に興味を抱いた彼は、演奏される機会の少ないグリーグのピアノ曲をレパトリーに入れ、晩年のグリーグと大いに

親交を深めて指導を仰いだ。グリーグの指揮でグレインジャーがピアノ演奏を務めるコンサートツアーも企画されたらしいが、グリーグが亡くなったためこれは実現しなかった。

語り伝えられるエピソードは尽きないが、悠久の時をかけて醸成された音楽は饒舌である。北欧の自然をイメージさせる雄大なスケールと、繊細な美しさをもつこのコンチェルトは、篠崎靖男の指揮と「ミュージズ」中村絃子のピアノで、極上の輝きを放つことだろう。



Photo:Hiroshi+Takaoka

びわ湖ホールに「ミュージズ」降臨！
中村絃子のピアノに酔う、極上の時間。

information

篠崎靖男プロデュース・オーケストラ・シリーズ 第5弾

北欧春浪漫

- 2015年4月19日(日) 15:00開演 びわ湖ホール大ホール
- KEIBUN友の会会員料金 / S席6,000円、A席5,000円、B席4,000円、C席3,000円
- 指揮: 篠崎靖男 管弦楽: 日本センチュリー交響楽団 ピアノ独奏: 中村絃子
- 曲目 / 田中カレン: 生命の水(2012)、グリーグ: ピアノ協奏曲 イ短調 作品16、シベリウス: 交響曲第2番 二長調 作品43

KEIBUN友の会ねっとも優先受付

12月12日(金) 9:30～

KEIBUN友の会電話優先受付

12月19日(金) 9:30～

一般発売

1月11日(日)